ましく思つて居た八重子は、老人の受兒なる事さへ知つたのである。

嬶ては老人より磯川に通じて、老人自身に迎に來べしとは、俊子と共に兼て期して居た事であるから、お今は厚く禮を謂つて、座を退つて髪を取繕つて、着物を着換へて、再び立出でると、間も無く國代老人と共に黒田の家を辭して、門に待たせてあつた車に乘るが早いか、二臺の車は室町さして勢好く駈け出した。

お今は恰も夢を見て居るやうな心地であつた。

× × × × × × × × ×

其から幾程も經たぬ間に、健三とお今は結婚の式を擧げた、其の日は

黒田も淡島も招かれて座に連なつたが、以來黒田と磯川とは最も親密な間となつた。八重子は一度淡島を嫌つたが、心機一轉父の勸に從つて、學士に嫁がんと思ひなしたのは、お今が家出の噂の父の口から自分の耳に入つた。頃の事であつた。でこは健三がお禮にと謂つて、其の間に周旋してお今との結婚の後間も無く、合衾の式を行つた。賴四郎は一家の風波の既に收まつたと見て、豫て期圖した海外殖拓の事業に手を着けんと、程なく横濱出帆の汽船に搭じてニューギニヤに趣いた。此の日賴四郎を見送らんと横濱埠頭に立つた人々の中で、最も痛切なる涙を以て離別の手巾を振つたのはお今であつた。執拗で意地惡で而して高慢で酷薄であつたお定とお國とは、結婚後は復健三お今が

間に啄を挿さまうとはせず、最も老實なる慈母となつて、愛姉となつて、此の新夫婦に對した。無頼漢櫻山は、頼四郎がニューニギヤに向つて出發した前後に、他の詐欺事件に依ッて警視の二局へ護送された、との噂を新聞の三の面の十行ばかりの埋草となッた。

驚喜限り無かッたのはお絹であッた。健三は結婚果てゝ二週日の後、此の敬虔なる新婦と、姑とを提へて、一度稚馴染のお今の故里を訪れた。兩人が初戀の燃え出し川の邊の柳もまた丘の邊の森も依然として渠等を迎へた。お今は常に初めて東京に出て冷かに待遇された心細さを想返しては、何事をも忍びて契渝らざるべきを誓ひ、健三はまたお今が家出せし時の憂慮、櫻山に死にしと威嚇されし時の悲痛苦悶を思

出ては能く妻を愛すべき所以を學び得たといふ事で、磯川の麥酒製造所の今も人の知る繁榮は、全く斯の新夫婦の睦まじき間から産れ出た餘光ではあるまいか？。

自由結婚（終）

昭和二年五月一日印刷
昭和二年五月五日發行

【定價金壹圓五拾錢】

自由結婚奥付

著作權所有

著者　德田秋聲
　　三島霜川

發行者　東京下谷區仲御徒町四丁目六番地
　　石渡保次郎

印刷者　東京下谷區御徒町二丁目二四番地
　　石野觀山

發行所　東京市下谷區仲御徒町四丁目六番地
　　振替東京三一七五六番
　　電話下谷六一二二番
　　石渡正文堂

福壽堂印刷所

◆石渡正文堂圖書目錄—摘要◆

石川しづ子女史編著

姙産と育兒

菊版洋裝箱入美本
四百頁餘
定價金壹圓八拾錢

國家社會を保持する上に於て、結婚……姙産……育兒……の大切なることは、今更ら喋々を要せぬのである。この重大なる問題を土臺として石川女史が多年の經驗と、該博なる學理とを酌量研究の結果、玆に本書の出現を見たのである。故に本書一と度び世に公にせられてより、月餘に至らずして版を重ぬること數回に及ぶ、實に斯界の權威として大に誇るもので、家庭の重寶とすべきは勿論、産婆學、看護婦學の實際教科書として推稱すべき良書であります。

◀机上の花の書架▶

笹川臨風著

淀君

四六四十取
七百五十頁
洋裝箱入

……(定價金壹圓五拾錢)……

曉の空に杜鵑啼く、一聲、二聲、三聲、聲は足羽川の下手から、國見ヶ嶽の方へ消え行く、……大阪城の興廢を、一笑一怒のうちに決すてう、妖婦? 烈婦? 花の如く、蝶の如く、夜叉の如く、實に豐臣家を靠にするもの淀君……片桐……石田……木村の勇將猛卒雲の如く、紅紫とり〳〵、千態萬狀、著者の靈筆右に左に、圓轉自在、能く其眞髓をうがつ、實に卷を揭く能はざる宜なる哉

徳田秋聲著

惑

定價壹圓五拾錢
四六四十取、六百二十餘頁洋裝箱入

著者の文筆の勇は世既に定評あり、明治より大正文壇の重鎮にして、爛妍靈妙の文字は、常に卷中に活躍する宜なる哉。六百餘頁の一字一句、血を吐き熱を發し、戀に生きて情に泣き、波瀾と恩怨、實に當代稀に見るの好著なり

林弘之先生著

英語練習自在

袖珍美本、定價金五拾錢

初學のものでも中等學生でも一寸忘れたことが能く解かる樣に出來て居ますから、英語を獨習するには欠くべからざる良書であります

工學士　生野團六先生著

實驗工業の話

袖珍美本　定價金四拾五錢

復興は關東斗りでありません帝國の全領土皆復興の氣を以て充滿して居ります此復興の氣運は何を意味するか曰く帝國產業の發展を期さなければ實に經國の難を招くものなりてう所謂國運の進展を意味す。本書『實驗工業の話』それ何を語る乎

圖書出版
書籍雜誌卸

東京市仲御徒町四ノ六
振替東京三一七五六番

石渡正文堂

終